［研究ノート］

色彩表現について
オリジナルカラーの制作を通して

小橋　圭介

1. 目的と背景

私たちの身の回りには色彩が溢れている。しかし、あまりにも身近な存在であるため、日常的に意識して接することは殆どない。筆者が担当している「色彩表現論」では、身近だからこそ意識しづらい色彩について改めて想いを巡らせることで、私たちの生活がどれだけ色彩に彩られた世界なのか実感してもらうことを目的の一つとしている。同科目の課題に「オリジナルカラー」というものがある。これは、受講生にとって身近なモノ・コトを「色彩」と「色彩名」で表現してもらい、普段無意識に接している色彩を意識する「きっかけ」を作るために実施している。

私たちは何らかの色彩を観た時に「赤」、「青」、「黄」と半ば無意識に近い範疇で色彩とその名前を結びつけて認識している。そこには過去の経験や知識的な背景が影響している訳だが、この「色彩」と「色彩名」は、先人たちが他者と色彩を共有しようとした産物であり、刻一刻と変わっていく空の色や植物、絵具、織物の糸の色にまで魅了された結果なのである。人々は色彩の名前を手がかりとして、その違いを区別したり、記憶したり、また色彩のイメージを思い浮かべたりしている。例えば、日本の伝統色を取り上げてみても、現在までに系統的に整理されているものとして、その色彩は千百余色にも及ぶと言われている。

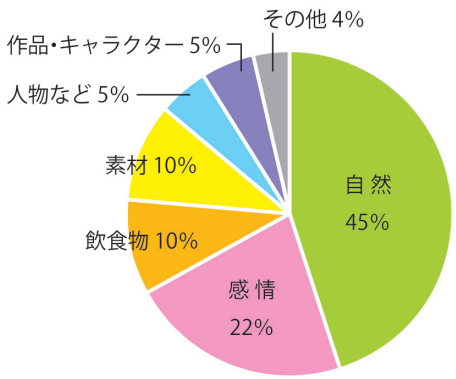
学生たちが触れたモノ・コトに魅了された感覚を、色彩と色彩名に定着させてきた先人と同じ行為を追体験することで、色彩がいかに生活に密着しているのか、感情に影響を与えているのかを感じてもらう。色彩というのは、人間のあらゆる体験に関わるものでもある。また、完成した色彩の観賞を行い多種多様な「色彩」の生まれる切り口に触れることで、お互いの感受性を刺激する場としても活用している。

本研究では、過去に授業課題として集めてきた様々な「オリジナルカラー」を分類することで、その色彩がどのような状況からイメージを膨らませて色彩として定着しているのか考察する。また大学生たちがどのようなモノやコトから色彩を連想しているのか、その傾向も合わせて分析する。

2. 研究方法

作品総数197点を、色彩の名称及び由来にもとづいて分類していった。一般的に色彩名は、「琥珀色」や「桜色」などのように自然界に見られる諸現象や動植物鉱石の見かけの色からきた色彩名と、「洗朱」や「白緑」などのようにそれら自然素材を加工して着色する技法によって表明された色彩名に二分される。分類の結果、二分だけでは収まらず、大項目として「自然」、「感情」、「飲食物」、「素材」、「人物」、「作品・キャラクター」の6カテゴリに区分することができた。各項目の割合は図1で示した通りである。以下、各項目について触れていく。

図1　オリジナルカラーの分類



自然：

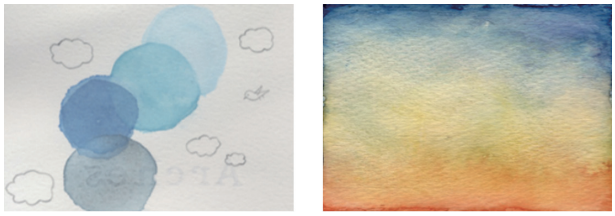
自然をモチーフにした色彩は作品総数の約半数を占めており、日本の伝統色においても「紅梅色」

や「孔雀青」など、自然から多くの色彩を得ている。もちろん、科学塗料が開発される以前において色材は動植物から生成するしかないため当然といえば当然かもしれないが、色彩が自然の生殖や移ろいと密接に関わり、先人が「色彩」という形で定着を図り自然との対話を行っていたのは間違いないだろう。科学技術の発達で天然由来の成分を必ずしも必要としなくなり、色彩と色彩名との関連性が希薄になっている現代の学生たちにとっても、色彩という身近な対象と改めて向き合う際に、同じく身近な存在である「自然」に意識が向くのは人間の本能なのかもしれない。この項目を更に細分すると、空（24%）、水（15%）、陸（2%）、動物（7%）、植物（7%）、物質（9%）、現象（7%）、天体（10%）、季節（16%）、場所（4%）となった。

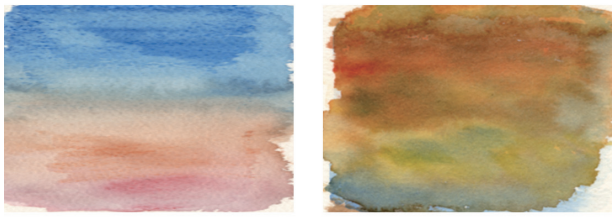
先に触れた伝統色も自然をモチーフにした色彩は多いが、大半は動植物が対象であるのに対してこの結果は非常に興味深い。因みに、本課題における「動植物」は14%と割合としてはかなり少ない。これはどの項目においても当てはまることだが、学生たちは「新しい色彩」を作ることが目的であるため、既にある色彩名との重複を避けたためではないかと推測している。

「空」に関する色彩は最多で21点あったが、純粋に「空色」としたものは2点のみで、他は「日の出色」、「日の入り色」、「黄昏色」などがある。（図2）一般的に空は青系統の色彩で表現されることが多いが、今回は夕暮れ時を表現し暖色系が非常に多く見られたのが印象的であった。刻一刻と移ろう空の色の定まらなさや僅かな間しか現れない貴重な瞬間を色彩に定着させようという思いが名前にも現れている。「雨上がりの夕焼けの色」や「金曜の夕暮れどき色」など、特定の要素を付け加えることで更に細かい状況設定をしている色彩もあった（図3）。「水」は海水・淡水というだけではなく、水中、水面、水たまりや雫など、水をどのような視点で捉えるかという点にも意識が向いているのが見て取れた。空のように短時間で起こる変化もあれば、「季節」のように長期間で緩やかに変化していくものもある。季節の移ろいは日本人が自国の特徴として頻繁に取り上げるひとつであり、「春色」、「梅雨色」など、空についで多くの色彩が作られている（図4）。

図2　空をモチーフにした色彩 ①



■ 空色　■ 日の出色



■ 日の入り色　■ 黄昏色

図3　空をモチーフにした色彩 ②

■ 雨上がりの夕焼けの色　■ 金曜の夕暮れどき色

図4　季節をモチーフにした色彩 ③

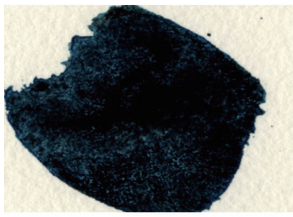
■ 春色　■ 梅雨色

他にも、動物・植物・物質などから着想を得て制作しているが（図5）、興味深いのは「現象」である。「時間色」と「足音色」と名付けられ、視覚的な情報とは少し異なる視点から色彩が作られている。多くの色彩は既存の事物を参考にして作られるのが前提だが、このような色彩に触れることで、改めて色彩が生まれる土壌の裾野の広さを実感できる（図6）。

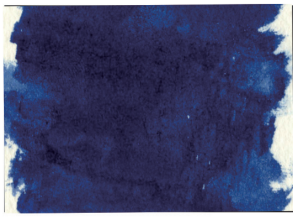
図5　動物・植物・物質などをモチーフにした色彩

■ 桜文鳥のお腹色

■ ROSE SUN

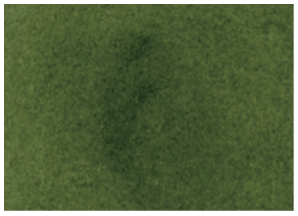


■ 濡れたアスファルト色

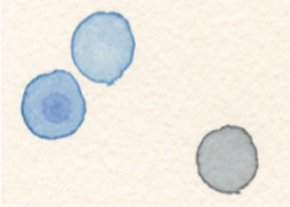


■ 甚兵衛男子色

図6 現象をモチーフにした色彩



■ 時間色



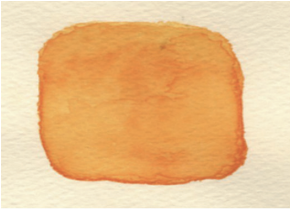
■ 足音色

感情：

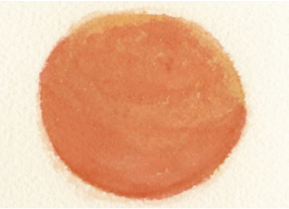
感情を取り扱った色彩名は既存の色彩で見ることは殆どないが、「色彩心理」という言葉からも分かる通り色彩と心理は密接に関わっている。例えば、「赤」を見ることで活動的・情熱・興奮等といったイメージを持つと一般的には言われ、ある色彩を見ることで一定の感情を想起させることが出来る。ただし、あくまでも一定の感情傾向があるだけで、絶対と断言することは出来ないし名称を冠すことで色彩のイメージを誘導することがあってはならない。既存の色彩名に感情を表現した語句が用いられない理由はここにあるのではないだろうか。その意味では、本研究で得ている色彩とその名前は極めて現代的なものであり、且つ色彩の本質的なところに近いと言えるかもしれない。

得られた色彩を区分すると、ポジティブ（23%）、ネガティブ（16％）、自己（7％）、睡眠欲（14%）、恋愛（16%）などになった。「至福の色」や「応援色」など、ポジティブな色彩は明るい色が多く黄色やオレンジといった暖色系の色彩が殆どであった。一部寒色系の作品も見られたが、いずれも澄んだ色彩が用いられていた。一方、「己の闇色」や「心の砂嵐色」などネガティブな色彩はプラスな感情との対比として寒色を用いたものもあるが、大半は黒色であった。いずれにせよ、世間一般で認識されている暖色・寒色といった色彩と感情には一定の関連性があるようで、本研究においてもそれは該当していた（図7）。

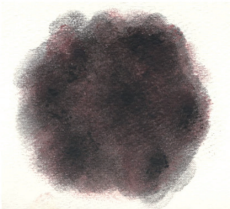
図7 感情をモチーフにした色彩 ①



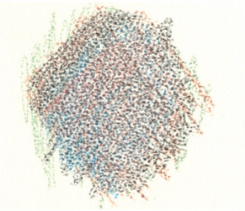
■ 至福の色



■ 応援色



■ 己の闇色

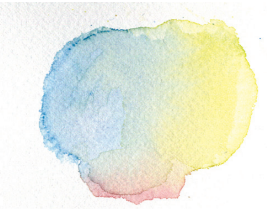


■ 心の砂嵐色

学生（20代前半）を対象に課題を実施しているからなのか、恋愛感情を扱った色彩が一定量集まった。「妄想色」や「恋する乙女の色」など暖色系というかほぼピンクを用いられており、その背景には「ハート」のイメージがあるようだ。一般的にハートは赤色で着色されることが多いが、恋心となった場合は同じ赤系統の色彩でも、もう少し穏やかな色として「ピンク」が選ばれている。ポジティブな感情として捉えているものが大半だが、一方で「キモチブルー」や「初恋色」など、ドキドキや不安など、不安定な感情も入り混じり寒色系を活用している事例も見られた（図8）。

図8　感情をモチーフにした色彩 ②

■ 妄想色

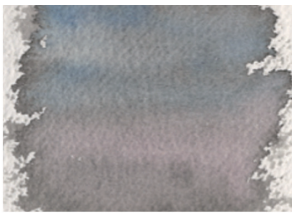


■ 初恋色

恋愛感情に次いで作品点数が多かったのが、「眠気」である。「眠たい時色」や「寝不足色」など、灰色やぼんやりとした淡い色調で、自身の感情を表出している。課題出題者としては何とも複雑な気持ちにはなるが、学生たちの素直な声とも言える。日々の授業やそれに伴い課されるレポート、重ねてサークルやアルバイト、友人たちとの交流等々、学生たちは学生たちで日々めまぐるしく活動をしているため、日々の多忙さが色彩という形で現れたのだろう。推測の域は出ないが、新社会人などにターゲットを変更すると、更に割合の増す項目の一つかもしれない（図9）。

図9　感情をモチーフにした色彩 ③

■ 眠たい時色

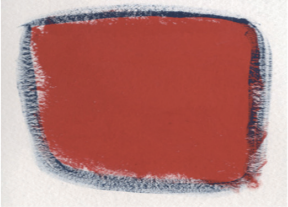


■ 寝不足色

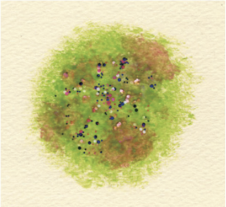
特定の感情に分類することが困難な色彩の中にも独特なものがあり、「青春色」、「夏休み色」、「大人色」など、何らかの情景が付随するものや、自分自身の置かれた立場から生まれているものなど様々であった（図10）。

図10　感情をモチーフにした色彩 ④

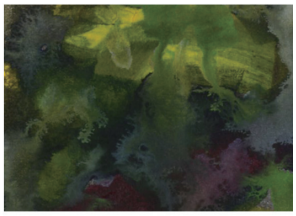
■ 青春色



■ 夏休み色



■ 大人色



■ 人生

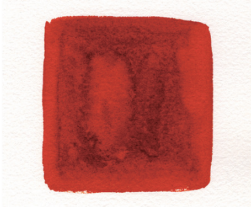
飲食物：

「チョコレート色」、「とうもろこし色」、「抹茶色」など、日本の伝統色にも幾つか飲食物を取り上げた色彩はみられる。ただし、食材そのものを指して色彩名としているケースが大半である。本研究の事例としては、もちろん既存の伝統色同様に「焼肉色」、「にんじん」など食材そのものの色彩を用いている場合もあるが、それだけではなく「おかんが作るタンドリーチキン色」や「二週間放置したさば味噌色」など、調理してかなり具体的なものから命名している事例もあった（図11）。この項目の全体的な特徴として、他の項目と比較して実際にモチーフを描いているケースが多い点が挙げられる（図12）。おそらく、具体的な事物があるために却って影響されてしまうのだろう。

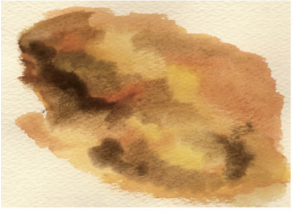
厳密に飲食物かと問われると分類に迷うのだが、面白い色彩名として「シュワシュワ色」といものがある。これは炭酸飲料の弾ける音から連想しているのだが、「事物」・「色彩」・「色名」の連動性を考えていく際に興味深い事例である（図13）。

図11　飲食物をモチーフにした色彩 ①

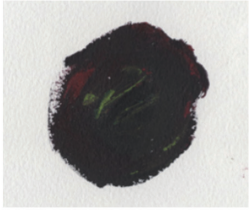
■ 焼肉色



■ にんじん

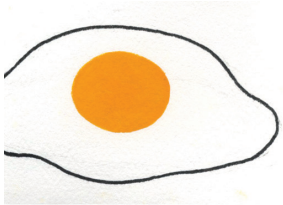


■ おかんが作るタンドリーチキン色



■ 二週間放置したさば味噌色

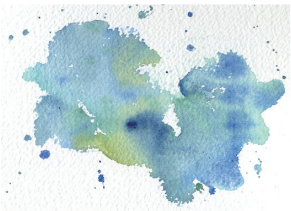
図12　飲食物をモチーフにした色彩 ②



■ たまごの黄身色

■ 萩色

図13　飲食物をモチーフにした色彩 ③



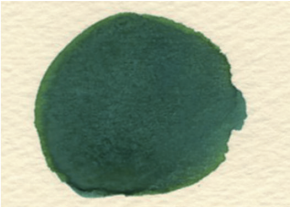
■ シュワシュワ色

人物：

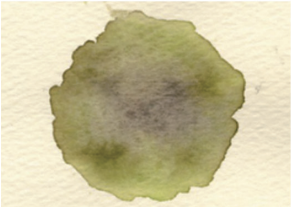
項目名としては「人物」としてはいるが、その中身は「家族」である。「母色」、「お父さんの作業着色」、「ばぁちゃん色」、「夏のおじいちゃんの手の色」といったスタンダードなものから、家族から連想される「家族色」や「実家のにおい色」、変わり種としては、母親の言い間違いから着想を得ている「シアトルマリン（ウルトラマリンの言い間違い）」と、バリエーションはかなり豊かだった（図14）。自宅から離れて暮らす学生も多く、このような課題を通して「家族」を連想する学生が一定量いるのは非常に嬉しく思う。どちらかというと暖色系で穏やかな色調のものが多く、制作者の家族との関係性も垣間見える。

図14　家族をモチーフにした色彩

■ 母色

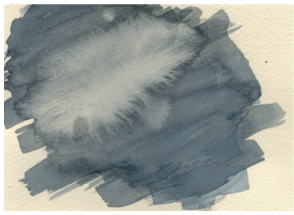


■ お父さんの作業着色



■ ばぁちゃん色

■ 夏のおじいちゃんの手の色



■ 実家のにおい色

■ シアトルマリン

素材：

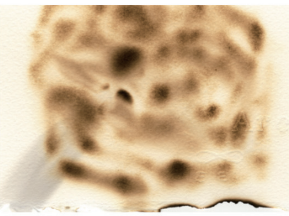
今まで触れてきた色彩群は、何らかのイメージを「色彩」と「色彩名」で表現していたが、この項目群は素材そのものを活用している点で他とは異なる。作品点数も「自然」、「感情」に次いで多い。コーヒーを用いた「ブラコ色」、頬紅を活用した「赤ちゃんのほっぺ色」、ご近所さんからいただいた玉ねぎを煮出したその煮汁に紙を染めて作った「6月19日のおすそ分けの色」など、色鉛筆や絵具といった既存の色材だけでは作り出せない自由な発想で色彩を作成している。なるほどと思わせたのは、紙を焦がした「こんがりトースト色」である。制作者自身に自覚はないようで残念だったが、この作品には、物質（今回であれば「紙」）の状態変化が色彩の変化と密接に関わっているという鋭い視点を潜んでいる（図15）。

図15　素材そのものをモチーフにした色彩

■ ブラコ色

■ 赤ちゃんのほっぺ色

■ 6月19日のおすそ分けの色



■ こんがりトースト色

色彩というのは本当に扱いが難しく、色見本帳を活用したり数値で管理したりと、いくら一定の法則を用いたとしても全く同じ色彩を再現することは極めて困難である。例えば、コンピュータを活用して「C 0%・M 100%・Y 100%・K 0%」の色彩をデータとして共有するとする。理論的には、数値化されているためどこで出力しても同じ色彩が得られるはずだが、プリンターや紙質など出力する環境が変われば、当然仕上がりは異なってしまう。更には、仕上がった色彩を観る光源や色材の経年変化なども加味するとなると、色彩を共有しようとする行為が

いかに困難であるかが分かるだろう。そういった中で、何らかの事物から連想するのではなく、素材そのものを色材として「色彩」とする行為は、極めて原始的な方法ではあるが同時に本質的な行為とも言える。

3. 研究結果と考察

既存の「色彩」と本研究で行った学生たち考案の「色彩」を比較した際に最も顕著な違いに、「色彩と色彩名」の関連性があげられる。学生たちの色彩は全てでは無いが、名前から色彩をイメージするのが困難なものが多い。それが悪いわけではなく、ここに色彩の魅力があると筆者は考える。色彩というのは元来、非常に曖昧で繊細であり移ろいやすいものである。それを先人たちが日常の中で出会った色彩への感動を何とか定着させ、かつ他者と共有しようとして、色彩と色彩名を体系的に整理してきた。つまり、私たちが色彩を生活の中で活用しようとした際、その大半は既に一定のシステムに乗っ取ったものなのである。しかし、便宜的に体系化された色彩だけが全てではなく、その間に無限といっても過言ではない色彩がまだ無数に存在するのだ。学生たちの生み出した色彩は、この事実を気付かせてくれるものであり、これこそが色彩の魅力の一つでもある。しかし、本研究は学生たちが自由に考えた「オリジナルカラー」を五月雨式に分類したに過ぎない。今後の展望としては、「色彩」・「色彩名」と制作者の年齢、性別、出身などを関連付けながら、何らかの相関関係があるのか分析していくことを検討している。更に分類・分析していくことで、一定の法則のようなものが導き出せるように研究を追及していく。同時に、学生たち自身がこの課題を通して、色彩と向き合うことや色が生まれる瞬間の素晴らしさを感じ取って欲しいと願っている。